

日本IVR学会 国際交流促進制度

CIRSE2005 参加印象記

滋賀医科大学医学部附属病院 放射線科 河野直明

CIRSE (Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe) の2005年総会が9月10日から9月14日までの5日間、フランスのニースにおいて開催されました。今回、私ははじめてCIRSEに参加しましたが、ニースとともに学会の印象について簡単に報告させていただきます。

南フランスのニースが開催地であったせいか、例年にも増して日本からの参加者が多かった(100人近く?)ようです。ニースの邦人はパリと比較し極端に少ないらしく、街にいる日本人は学会関係者の方が多いという状態でありました(ニースの日本料理屋のマスターによると、パリが数万人に対しニースの邦人は100人にも満たないらしくみんな顔見知りだそうです。学会が開催中だと知って妙に納得されていました)。会場でも普段日本の学会でお目にかかる高名な先生方以外に、私と同年代の先生方も数多く参加されているのをお見かけしました。

会場はリゾートな雰囲気のある街中心部とはやや離れた東に位置するACROPOLIS-CONGRESSで行われました。内部は大会場3部屋、小会場6部屋に分かれ、午前中は主として各テーマ別の専門家によるSpecial Sessionが平行して行われ、午後は一般口演と手技を直接学ぶHands-on Workshopが行われておりました。これらは全体として例年と同様のものと思われまです。E-Poster閲覧スペースには、多数のPCが設置され、個人的にはゆっくりと見ることができましたが、やや閑散とした感がありました(CIRSEのE-PosterもECRのホームページから後に閲覧できる為でしょうか)。口演発表は177演題で日本からは4演題でありましたが、ポスター発表は165演題中日本からのものは44演題でありました(ポスター発表は2004年よりすべてがE-Posterとなっており、プレゼンテーションはありません)。従ってポスターの中では日本からの発表が非

常に目立ったわけではありますが、その数の多さだけでなく、この中にはAWARDの2演題も含まれており質的にも日本のIVRが高いレベルにあることを示すものでありました。AWARDはE-Posterの優秀賞であるMagna cum Laude賞の滋賀医大新田哲久先生の「Pluronic F-127の基礎的研究」や、Cum Laude賞の聖マリアンナ医大西部病院山内栄五郎先生の「UV-cured materialを用いた新たな塞栓術の基礎的検討」も含まれていました。これらに関して少し紹介させていただきます。

新田先生の御発表であるPluronic F-127は、20度以下だと液体で20度から40度だとゲルになり60度以上で再び液体となる性質を持つ物質であり、今回はこのPluronic F-127がラジオ波にて通電性の無いこと、ウサギを用いその横隔膜下、胃粘膜下にて同物質がゲル状になることを実験的に確認し、その安全性、あるいはSpacerとしての可能性を証明するものでありました。山内先生の御発表は、紫外線の照射にて硬化する樹脂(ultraviolet-cured material/レジンを)を用い、動脈瘤モデルを塞栓するものでありましたが、注入用のカテーテルに光ファイバーが組み込まれ、その先端より照射される紫外線により同物質を注入すると同時に動脈瘤が塞栓されるというものでありました。いずれも新たな物質の臨床応用ですが、極めて実践的な基礎的研究が高く評価されたものでありました。

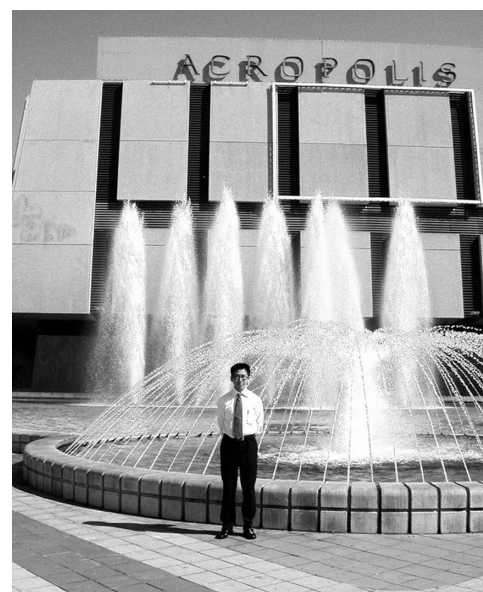
さて、会期中は晴天に恵まれ、ニースの街はガイドブックで見るとよりも一段と美しいものでありました。会場のすぐ東側には、新鮮な海の幸をいただける店があり、地元の人たちでにぎわう中、地中海から当日水揚げされた牡蠣、ウニなどをほんの数百年で賞味することができたほか、中心街ではベトナム料理などの旧フランス領の料理なども楽しむことができました。

次に、興味深かったふたつのSpecial Sessionについて紹介します。

Specilal Session—外傷—では、米国ニューヨーク市のSUNY Downstate Medical CenterのS. J. Sclafani先生の講演を聞くことが出来ました。私は、以前より外傷性脾損傷の診断、IVR治療に関して臨床的検討を行ってきたので、(今回のCIRSEにもその演題を出しました)外傷性脾損傷の診断、IVR治療で世界的に有名なSclafani先生の講演を聞くことは非常に感慨深いものでありました。

Sclafani先生は、今回のレクチャーで脾損傷のCT診断に関してとIVR手技(脾動脈塞栓術)に関してお話されました。CT診断に関しては、脾臓自体の損傷度、活動性出血の有無における有用性をもちろん強調されましたが、軽度の脾損傷でも再出血する症例、重度の脾損傷でも臥床にて経過の見れる症例も散見され、CTにおける診断の限界あるいは損傷過大、過小評価の問題を提示されていました。IVRに関しては、以前から推奨しておられる脾動脈の本幹塞栓術を解説されました。基本は、背側脾動脈の少し奥に金属コイルを留置し、被膜外へのextravasationのある症例に関してだけはgelfoamにて分枝塞栓を追加する方針をとっておられ、選択的分枝塞栓だけで成績が不十分なのは、外傷性脾損傷に伴う多数の脾臓小動脈、ジヌソイド、小静脈の損傷までも制御することは出来ていないのではと推察されていました。

Special Session-CIRSE meets Koreaは、韓国のIVRの現況を韓国のIVRist



時差ボケの残る学会初日朝、学会会場正面にて

達が紹介するといった企画で、今回の CIRSE から始まった新しいものでありました。韓国が選ばれた理由としては、IVRにおける最近の activity の高さが注目されてのことのようですが、確かに今回の CIRSE での韓国の口演発表数 8 演題、E-Poster 発表 11 演題ということからもそれは伺えました。さて KSIR (Korean Society of Interventional Radiology) 会長の Kyu-Bo Sung 先生 の口演でこの Session は始まりましたが、まず KSIR の会員数が現在 144 名という少なさに私自身は驚かされました。しかしながらその中で紹介された KSIR の活動は、本邦と比較しても遜色のない精力的なものでした。臨床面では、本邦と同様の肝癌、胆道系の IVR が多く行われていますが、IVRist が少ないせいか KSIR 会員が主に勤務する大学病院にてほとんどが行われているようです。個人的に新鮮であったのは、Asan Medical School の Ho-Yong Song 先生が紹介された良性尿道狭窄 (外傷、前立腺肥大) に対する Retrievable stent の基礎的検討、初期臨床経験でしたが、外尿道括約筋近傍の病変に対して有用な可能性を示唆するものでありました。

その他、今回やや目新しく感じられたものとしては、Yttrium-90 microsphere

に関する発表でありました。肝腫瘍の口演の Session において、TACE や RFA の演題にまじっていくつかの Yttrium-90 microsphere の発表が見られましたが、正確には珍しく感じたと言った方が良いでしょう。Yttrium-90 microsphere は、Yttrium-90 含有の 20-40 μm の粒子であり、半減期は 64 時間、経カテーテル的に注入することで Internal radiation therapy に使用されるものであります。切除困難な肝腫瘍 (原発、転移性) や化学療法に不応性の肝腫瘍に対する治療法として、Yttrium-90 microsphere の肝動注の報告がなされており、姑息的治療としての効果や安全性に関しての初期治療経験を報告するものでありました。A. Martinez (Spain) は、2003 年からの Prospective study で、37 患者の切除困難な肝腫瘍 (原発、転移性) に Yttrium-90 microsphere の動注を行い、1-17 ヶ月のフォローにて 35% の局所制御率を報告しておりました。標準治療で制御困難であった症例を対象としているわけで、やはり効果の程は評価が難しく思われました。また、T. F. Jakobs (Germany) は、化学療法に不応性の転移性肝腫瘍症例 25 患者にて同様に Yttrium-90 microsphere の動注を行い、30 ヶ月のフォローにて 1



学会会場玄関 CIRSE 20 周年記念モニュメント前にて、滋賀医大 古川先生と(左側)

例の胃潰瘍を認めた以外には大きな副作用はなかったとの報告をしておりました。新たな抗癌剤、分子標的治療薬と共に今後治療成績を注目していきたいものの一つであります。

以上、簡単に報告させていただきました。今回、国際学会に参加するのは 3 回目なのですが、最新の情報が得られることはもちろんのこととして、日常診療のモチベーション向上や知識の更新にこれ以上のものはないと感じます。最後にこのような機会を与えていただいた日本 IVR 学会ならびに滋賀医大放射線科の方々に感謝、御礼申し上げます。